

現代中国研究と私

——現代中国研究40年をふりかえって——

松野 昭二

編集委員会から「夏期休暇中の宿題ですよ！」と手渡されたテーマは、「中国研究と私——中国研究40年をふりかえって」というものでした。私はこのテーマを「現代中国研究と私」に変えさせてもらい、以下、編集委員会の趣旨を尊重しつつ、私の心にまかせて書かせてもらうことにする。

1、私にとっての「8. 15」（日本帝国敗戦）：

「9. 18」（いわゆる「満州事変」）の前年、1930年12月2日、私は大阪市北区網島町2番地（歌舞伎外題「心中天網島」の「道行き」の場である）で、父正吉、母シズエの次男として生れた。この町の北側を流れる大川の対岸には「通り抜け」で有名な造幣局がある。世界大恐慌で開幕した30年代は、ファシズム・イタリア、ナチズム・ドイツと日本帝国の軍事同盟がいよいよ強化され、日本帝国が中国大陸への侵略を加速化した時代であり、国内では右翼的動向が顕在化した時代であるが、私が桜宮幼稚園に通う頃はまだ長閑であった。その後、父親の事業の都合で布施市長栄寺町（現東大阪市）に転居し、布施第四尋常小学校（現高井田東小学校）に就学した。当時、私は一種の虚弱児であり、1時限の授業中に校庭に出て数分間散歩することが許され、授業中でも午前10時と午後3時頃にはリンゴ、ミカンやバナナを摂ることが許されていた。父親正吉は私を鍛錬するため、ほぼ毎日のように剣道場に通わせた。

1937年の7月7日早朝、「蘆溝橋（マルコポーロ・ブリッジ）事件」を契機として「宣戦なき戦争」日中戦争が全面化し始めた。その年の末、父親が徴兵されて中国大陸へ「出征」した。剣道場通いは中断され、父親の無事を祈願して鴨高田神社への早朝参拝と掃除という鍛錬が始まる。

父親が無事に帰国する前、尋常小学校4年生の春、再び網島町に居を移し、桜宮尋常小学校へ転入した。「局地的事変」と呼ばれた日中戦争が長期化するにつれ、主食米穀、砂糖や衣類等々が配給制になり、生活の至るところに戦時色が影を強く落とすようになってきた。4年生の夏休みの末、盲腸炎を思い開腹手術をうけた。その後、どういうわけか、私の虚弱体質はしだいに変化しはじめ、小学5・6年生では人なみに運動会に参加できるようになり、中学生時代の剣道特別訓練や軍事教練にも耐えうるようになった。1941年（昭和16年）12月8日早朝、私は町内会のラジオ体操に参加していた。ラジオ体操の快適なリズムが突如中断されて、「臨時ニュースを申し上げます。本8日未明、帝国陸海軍は南太平洋において、英・米・蘭と戦闘状態に入れり。」という「開戦のニュース」が流された。日本帝国は「宣戦」を布告しかつ「開戦の詔勅」を喚布するという手続きをへて「戦争」を始めたのである。

1943年（昭和18年）の春、大坂市立中学校に入学した。この中学校は大阪市が最初（1941年春）

に設立した学校である故か？「大阪市立中学校」が固有の校名であり、現在も「大阪市立高等学校」と称している。戦時色が一段と深まる中で、この中学校の制服は帝国陸軍一兵卒まがいの国防色の制服、巻羈絆に雑嚢というものであり、また校長が私たちの入学式式辞で「教師は上官と思え、校舎は兵舎と思え」と述べるような気風に満ちていた。入学年度の半ばから、中学校での学習教科の中で英語（Crown English）、英習字、音楽や絵画等々に代わって武道（柔・剣道）や軍事教練に重きが置かれるようになると同時に、中学校は軍部、政府や府市の意向をうけて、中学生に「銃後を守る小国民」としての自覚を持たせるため、農繁期に「勤労奉仕」を課すようになった。私達は京阪電鉄沿線の門真、古川橋近辺の農家へ農作業の手伝いにでかけたり、湿田を乾田にかえる「暗渠排水工事」に従事した。

中学校での軍事教練は日とともに厳しさを加えた。中学1年生（13歳）夏、学年全生徒は弁当2食分を携帯して、一晩かけて暗がり峠を越えて奈良市の春日大社に至る長途を夜行軍した。睡魔に襲われ眠りながら先行する学友の足元を頼りにひたすら歩いた。また、中学2年生の厳冬2月、平素は許されない手袋の着用が許され、金剛・葛城縦走コースを「厳冬行軍」する。山中で道に迷い、ついに終電車にも間にあわず、とある集落の集会所で一晩お世話になり、熱い芋かゆをご馳走になる。明けて早朝一番電車で帰路につく途中、引率の軍事教官から「実に得がたい軍事教練であった。本日は登校するに及ばず」との達しがでる。またこの頃、赤軍と白軍に別れた野外戦闘訓練がしばしば淀川河川敷（現在の楠葉国際ゴルフ場付近）で行われた。

1944年の秋がすぎた頃、教科学習、武道・軍事教練と勤労奉仕という3本柱の中学生生活にも終止符がうたれ、「勤労働員令」によつて日本帝国陸軍香里火薬製造所（現住宅都市整備公団香里団地）で昼夜2交替体制で労働する生活がはじまった。当初、私たちが多く製造したのは250キロ航空爆弾（特別攻撃機が1発抱えて出撃した）であったが、やがて、その250キロ爆弾を破砕して「棒地雷」を1日当たり数百個も製造することになった。この地雷は大岡昇平『レイテ戦記』によると「第1師団がレモン峠攻防戦で組織的かつ有効に使用した。」という。

1945年春、沖縄攻防戦の峠がみえた頃、「本土決戦に備えて、燃料確保のため出張せよ」と命令をうけて、勤労働員中の同学年から20数名が選抜されて、滋賀県饗庭野と上中（小浜線）の中間にある山林地域へ出張した。さすがに、この山奥は静かでB29の爆音を聞くことはなく、爆弾や焼夷弾の破裂音を聞くこともなく、宿舍の山小屋から3～4里行程で三十三間山の尾根に上ると眼下はるかに小浜線をゆく汽車や若狭湾が望見された。私たちの任務は「炭焼き」作業を手伝うことであったが、現地での仕事の中心は雑木を切り倒した速成の畑にサツマイモの苗を植え付けることであった。ある日、同行の某君（なにかの理由で入学が遅れていたのであろう）に「召集令状」が届いた。徴兵年齢が18歳に引き下げられたのである。

やがて、1ヵ月余が過ぎて、「原隊復帰（香里火薬製造所へ帰る）」する日を迎えた。その日、2里ほど下の集落に住む人々が真っ白な米飯に漬物や梅干しをドカ弁当箱にしっかり詰め込んで持たせてくれた。帰路は大変であった。私たちの汽車は瀬田川鉄橋付近でグラマン艦載機から銃撃されそうになり、山科隧道のなかでは「高槻、茨木方面、目下空爆をうけている。」という情報をえて退避する有様でした。ようやく香里火薬製造所に帰着し、直ちに帰宅を許された。母親は私が食べ残した弁当の飯を一粒々々大鍋に移し大根の葉や大豆油粕等を加えて雑炊にしあげて、同日一家の夕食にした。もう、日本帝国の敗戦が近い頃のことである。

1945年8月15日正午、陸軍香里火薬製造所の中央広場で「玉音放送」を聞いた。雑音が多く正確に聞き取ることはできなかったが、私たちが配属職場の生火薬乾燥工場に戻ると、職長から所長である某陸軍少将からの伝達事項として、「日本帝国に対して無条件降伏を求める『ポッドダム宣言』を受諾する」という内容であったことを知らされた。

毎年8月15日が近づくと、TV番組等で文化人やタレント諸氏が「『玉音放送』を聞いて解放感を全身で感じた」という類の発言をするが、私がまず感じたのはいいようがない「口惜しさ」であり、「虚脱感」でありました。旬日をへて、勤労働員が解除され中学校にもどったが、校庭はサツマイモ畑であり、教室はタタミが敷かれた寮そのままであった。教室では日本帝国の国定教科書の一部（国威発揚、皇国史観等の叙述）を墨で塗りつぶす作業におわれた。教師も生徒も「登校すれども、授業せず、学習せず」の日々が続いた。そうした生活の中に、神戸大空襲で養父母と妹を失った野坂昭如（当時、張満谷）があらわれた。彼は「登校もしなかった」が、試験にだけは顔をでて、適当に良い成績をとってはまた「登校もしない」生活を過ごしていた。この間のことは『哄笑記』（『週間朝日』連載）や彼の文名を高めた『アメリカひじき』や『ホテルの宿』にくわしい。

このように、私は学校での教科教育だけでなく、その生活のすべての側面で受けた「訓導」によって、「玉音放送」を聞いて日本帝国敗戦を知り、涙を流して悔しがり、虚脱感に襲われる1人の軍国少年として育てられ、戦後は「登校すれども学習せず」という戦後生活を過ごすことになる。

2. 中国に関心を持ち始めた頃：

魯迅先生はたしか「幻灯事件(?)」という一文のなかで、「私は中国が外の侮りを受けるのは中国人の身体が健康でないことによると考えていたが、これ以後それは中国人の魂が健全でないことによると考えるようになり、医学を学ぶことをやめ、文章を書くことにした。」と書いておられる。これは「今にして思えば」ということなのであろう。「今にして思えば、私が中国に関心を持ち始めた」のには次のような諸事情、経過があった。

同世代に属する文化人やタレントたちは毎年「8.15」が近づくと、「その日が彼らにとつてどれほど待望された日」であったかを語るが、その度に、私は私が彼らほど高等な人間では決してないのだと思知らされる。そして、「戦後50年」の「8.15」でも、またまた思知らされた。

戦後、新しく『公民』という教科が登場し、「民主主義、基本的人権、平和と戦争、戦争責任」等々の学習が始まった。私達はその内容が戦時中の国史、修練や倫理教科とは全く異なるものであることに戸惑いを感じたが、それにもまして戸惑ったのは、数ヵ月前まで「現人神天皇陛下」を褒め称え、「八紘一宇の精神」を鼓舞し、「一億玉砕」を声高く唱えてきた先生がその同じ口から『公民』を教え始めたことであつた。戦争犯罪人の逮捕が続き、歴史や社会を律する価値基準が180度見事に転換した。私たち中学生はこの大転換に順応するほど器用ではなかった。そこで、仕方なくまず始まったのが「登校すれども、学習せず」という生活であった。そのような生活の中で、私は復員してきた先輩たちの口から、あるいは新聞や雑誌等々で第2次世界大戦アジア戦線の実情を知る機会を多くもつようになり、「8.15」のあの「口惜しさ」を始末する方法を捜

しあてることになった。それは実に素朴で安直ないわば『兵器・装備優劣説』（つまりは生産力水準に規定される）という方法である。すなわち、「米軍新鋭爆撃機 B29（ボーイング29）は高度8千から1万米を高速度で飛来し、本土各地を爆撃しているが、零戦や紫電（改）はこの高度では有効な迎撃をくわえることができなかった。」（元予科練習生パイロット談）。「英軍戦車は爆薬を装着した日本帝国陸軍の軽・中型戦車によって撃突されても、少しの損害も受けなかった。」（ビルマ方面から復員した従兄弟談）等々という。これ程までに兵器・装備の優劣が隔絶しておれば、日本帝国の敗戦は当然であり、十分に納得できるというものであった。しかし、中国戦線において、帝国陸軍は「兵器・装備で圧倒的に劣る八路軍等」によって「ドロ沼」に引きずり込まれていたという事態が存在していたのである。この事態は『兵器・装備優劣説』では説明できない。中国戦線では兵器・装備の優劣とは異なる要因が働いていると考えざるをえない。中学3年生にとって、これは理解できない一種の謎であり、不可解なことであつた。謎解きの手掛かりを得ないままに、戦後退廃、虚脱、無気力の状況に身をおき、「登校すれども、学習せず」という日々がつづいた。

一方では、すでに敗戦直後の混乱期に、大正昭和初期にそれぞれ精神形成を終えていた人々によつて、「読書サークル」活動が始められていた。私たちの身边でもそのような動きがあつた。その中心人物は中学校の国語担当教師榊原美文先生であつた（先生は見事な瘦身であり、私たちはカマキリ「螳螂」と呼び親しんだ）。カマキリは早稲田大学文学部に学んだ人であり、在京学生時代から、近藤忠義氏等の日本近代文学史研究グループの1員であり、とくに樋口一葉の研究ではとくに名があつた。後に帝塚山大学教授を勤められ、立命館大学文学部でも講師を勤められ、和田繁二郎名誉教授と交流があつた。香里園の榊原先生の居宅等を会場に「読書（雑談）サークル」が京大生松原某氏、関学生目黒某氏、関大生赤松某氏や吉田定雄氏等々の参加をえて開かれていたが、それは同時に中学補修塾の役割をも果たしていた。サークルや補修ではしばしば蒸した甘薯が「お八っ」代わりに登場した。カマキリの居宅には岩波文庫、岩波新書（赤版）等や河上肇博士『貧乏物語』、エンゲルス『空想から科学へ』、永田広志『唯物弁証法』等々、戦争中には禁書であつた書物が実に数多くあつた。私たちは榊原文庫と呼びなして、よく借り出して読むようになった。シュンペイター『資本主義、社会主義、共産主義』や河上肇『貧乏物語』等を読んだのもこの頃であつた。それは、おそらくカマキリ氏の勧めによると思われる。カマキリ周辺には竹原聡治、四井威三夫や吉田清治等々の仲間がいた。

私は、このサークル活動等を通して180度転換した価値基準に対応する契機をつかむことになった。中学校で英語を担当された沢田某先生（東大文学部卒）もメンバーであり、先生のご紹介で竹内好氏（東大支那文学研究会の同人、『魯迅論』の著者）や新村猛氏（新村出先生のご子息、後に名古屋市長に立候補された）や近藤忠義氏等の警咳に接し得たのもこのサークルでのことであつた。尾崎彦朔氏（毎日新聞をバージされて浪人中、後に大阪市立大学教授）からレーニン『帝国主義論』の購読を受けたのもこのサークル活動でのことであつた。

このように、私たちがサークル活動や補修塾に熱心であつた頃、私たち同学年のなかに、戦争中に「皇国史観を鼓吹したり、翼賛壮年団幹部であつたにも拘らず、戦後教科『公民』を平然と教壇で教える」教師に対する不信感が急速に高まり、天王寺中学校に次いで「中学校騒動」が発生した。学級会、学年会や生徒集会がたびたび開かれた。この「騒動」は某日、MPがJeepを

駆って颯爽と介入して「教職追放」という伝家の宝刀を抜くことで解決し、私たち中学生の勝利に終わった。私たち中学生にとって、MPに代表される進駐軍（実は占領軍）はまさに解放軍であった。この「中学校騒動」のなかで、私たちとサークル同人の先生方や先輩諸氏との関係は一挙に緊密になった。

大阪市立中学校には、私をはさんで伊地智兄弟が二人いた。兄貴は1学年上で、陸上競技に熱心な人物で、弟君は2学年下でよく勉強する人物であった。兄貴は後に大阪外事専門学校ロシア語科に学び、弟君は大阪大学文学部仏文専攻（現在は東北大学文学部教授）に学んだ。この兄弟の長兄善継氏は当時大阪外事専門学校の若手教員であり、香里サークルのメンバーでもあった。この善継氏はサークルで「塞先生、徳先生」と題して、「五・四（1919年）にはじまる中国新文化運動」を講じられた。「人民中国」成立近きを予想させる事態を背景として、彼らの長兄善継先生に出会ったことが、『兵器・装備優劣説』では説明できない中国に対する関心を増幅させ、大阪外事専門学校中国語科に進学させることになった。私は私が中国に関心をよせる必然性的と偶然性がここにあると、今なお思っている。

それから20年近く後になって、私は孫文先生が「五・四」にはじまる中国の読書人、学生や市民の多様な言論及び社会的行動を「人民の心力」として「鉄砲に幾十倍幾百倍する」ものであると評価したことを知る。「サイエンス（Science）、デモクラシー（Democracy）」をスローガンとして唱え行動する人々の中に、教科「西洋史」の授業で教わった「近代を開く第三身分、市民」の姿を見たように思えたが、これは「孫文」（『中国革命史』1965年、法律文化社）を執筆する動機にもなった。

私が『兵器・装備優劣説』では説明できない中国そして歴史や社会のあり様に関心を持ち始めたのには、私を「軍国少年」を育て上げた、あの中学校時代にすでに前提的契機があったと思えてならない。その契機というのは二つある。その一つは、私たちが習った教科「西洋史」は古代から始まり中世・近世をへてさらに近現代に到るものであつたが、教科「日本国史」はといえば、肇国の時からすでに青銅製の剣や鏡が登場し、大いなる神として天照大神が君臨し、神武天皇の子孫である歴代天皇が統治し賜う「神国」として日本帝国が教えられ、歴代天皇の御名を暗唱することが求められた。それは、『大日本帝国憲法』の基本である「現人神たる天皇の統治権」を歴史として肯定するものであった。私は日本国史担当の教師に対して、「西洋史は人類が生産し生活する社会の歴史であるのに、日本国史はなぜ現人神である天皇に統治されるる臣民が生産し生活する歴史なのですか？」と尋ねたところ、答えは「馬鹿者！それは日本帝国が神国であるからだ。」というものでした。

その二つは、絵画担当教師若林正士先生（京都絵画専門学校、現京都芸術大学卒早々に着任、私たちはその風貌からゴシックと呼び親しんだ）の授業であった。ある時、ゴシックは一冊の絵画集を示して「絵画等芸術諸活動が人類の生産や生活との関わりをもつものである」と講ぜらるる中で、当時もっとも古いとされた絵画の一つとしてアルタミラ洞窟の壁画を素材として、「人類の狩猟生活の記録としての絵画、豊かな捕獲を祈念するものとしての絵画、等々」を語られた。その話は「西洋史は人類が生産し生活する社会の歴史である」という教科内容を赤銅色の壁面に描かれた「野牛と馬」として具現するものであった。ゴシックは定年退職されるまで大阪市立高等学校で勤務されので、旧制中学校第1期生から新制高等学校第30期生以上までの各世代を通しての恩師

である。退職されて数年後、嫌がるゴシックを説得して個展「イタリアの寺」を開いた時、私が「戦争中、私に社会や歴史に対する関心をもたせる契機を与えたのは、ゴシックですよ！」申し上げたところ、「そんなこと、おりゃ知らんで！そりゃ、お前の勘違いや」と一蹴され、「そんな！無責任なあ！」等々、中学生時代を回顧したことがあります。教師稼業40年近くの今になって、教師と生徒、学生との相互関係——コミュニケーションといわれるものは結局このようなもの（受けとる主体如何）なのであると、しみじみ感得させられた。

私は、日本帝国敗戦という事実に根ざした「口惜しさ」「苛立たしさ」から『兵器・装備優劣説』による納得へ、そして「読書サークル」の中から「謎に満ちた中国」への関心、さらには歴史や社会のあり様に対する関心へと、しだいに視点を移し遍歴してきたように思えてならない。

これは余談中のまた余談であるが、1995年8月末、孫娘にせがまれて伊勢スペイン村へでかけた時、ある古城風の建物（スペイン歴史博物館？）の一室にアルタミラ洞窟が復元されており、そこにささしくゴシックのいう赤銅色の壁面に描かれた「野牛の上半身（多数）と馬上半身（一頭）」をみる機会があった。

3、「日中不再戦」の基本的と「現代中国研究」:

私にとって「中国研究」はありえず、あるのはただ「現代中国研究」のみである。「現代中国」の「現代」とは時代区分でなければ、時代の呼称でもない。まして「今日の中国」というのでは決してない。日本帝国敗戦後数年をへずして、中国大陸では19世紀中葉に「天朝田畝制」（洪秀全）を唱えた太平天国軍が南中国を席捲し、20世紀20年代に「耕者有其田」（孫文）の旗を掲げた国民革命軍が北洋軍閥を壊滅させたと同様に、1947年末から49年初頭には、中国農民の積年の要求である「土地改革」の実施と人民解放軍の進撃とが相呼応して急展開し、『人民中国』の建設が間近いと見通された。日本国内では1950年6月「朝鮮戦争（日本でのみ動乱とよぶ）」をへて、戦後民主主義はわずか5年にしていよいよ窒息させられようとしていた。「2. 1」ストの強権的阻止に始まり、公務員労働争議権の剥奪、「三鷹事件」「下山国鉄総裁事件」「松川事件」等々があり、「逆風」が吹き荒れ「逆流」が溢れ出ようとする時代になった。

こうした「逆風」「逆流」に抗して、そういう時代であればあるだけに、日本帝国の戦争責任を明白にし、「悲惨な被害をうける戦争」に反対するだけでなく、「悲惨な被害を加える戦争」にこそ反対する立場の確立が急がれた。上海内山書店店主であり中国の年若い読書人の理解者であり、なによりも作家魯迅を敬愛し保護された内山完造氏が筆頭世話人となって、「日中不再戦」を掲げる国際親善友好団体が組織された。日本中国友好協会成立大会は1950年9月30日（参議院議員会館）10月1日（神田教育会館）の両日にかけて開催された。その成立大会は、アメリカ占領軍のMPや警官による厳しい検問と監視のなかで開催された。

この協会はその「成立宣言」や「会則」等々にあるように「思想信条の相違をこえて、日本と中国の両民族間の親善と友好を促進する」ことを目的とし、この目的に賛同する各界の有志を会員とする大衆的組織としての性質をもつものであり、やがて前後して設立される中国研究所や国際貿易促進協会とともに「日中関係三団体」とよばれたが、この協会の目的に賛同する学者・研究者たちが新しい立場から中国研究をすすめる「学会」を創設する機運が高まってきた。その新しい立場とは「戦前や戦中の中国・アジア研究がそれらの地域を研究の対象としてのみ取り扱う

立場にとどまった以上、その主観的な意図あるいは願望に関係なく、日本帝国の中国・アジア諸地域と諸民族に対する侵略戦争、侵略経営のために奉仕するものの変質せざるをえなかった」という立場でありました。こうした機運をつくりだす中に、関東では平野義太郎先生をはじめ、倉石武四郎、竹内好、村松祐次、野原四郎、浅川健次、幼方直吉、米沢秀夫、江副敏生等々の諸先生がおられ、若手では本橋渥、松本昭、新島淳良、野沢豊、針生誠吉、菅沼正久の諸氏がおられて、研究的集会在開催されていた。新しい立場を確立する議論は中国研究所内でも時には静かに時には激しくおこなわれた。この集会はその後「現代中国学会」関東部会として再編される。こうした議論はやがて中京地方や関西地方にも伝えられてきた。

当時、関西では天野元之助（元満州鉄道調査部、京大人文科学研究所）先生をはじめ、宮下忠雄、山名正孝、北山康夫、金子二郎等々の諸先生がおられ、若手では儀我壮一郎、芝池靖夫、内藤昭の諸氏がおられ、読書会とよぶに相応しいほどの会合がもたれていた。また、中京地方では小岩井浄先生（戦前、大山郁夫委員長「日本労農党」の書記長）が学長を勤められた愛知大学がその前身からして中国研究を重点の一つとしていた。関東から伝えられた議論の要点は「先輩研究者の手はその意図如何にかかわりなく戦争に協力し汚れている。これを総括せずに、人民中国の研究は成立しない。」と主張し、言外に「若手研究者の手は汚れていない。」という議論であった。この論点は「若い世代は戦前、戦中未成年であることで戦争協力・加担の責任から免れる」という安直な世代責任論ともいうべきものであったが、「日中不再戦」「実践主体であると同時に研究主体である中国民族と協働する」立場に基礎をおく研究団体の誕生を促進する一つの契機となったことは疑いない。こうして、日本中国友好協会が「日中不再戦」を掲げて活動し始めたという状況や「朝鮮戦争」の激化という状況を背景にして、約1年後の1951年秋、主として関東研究集会（後に関東部部）と関西読書会（関西部会）が統合されて「現代中国学会」が発足した。初代会長には中国研究所所長の平野義太郎先生が就任された。

「現代中国学会」の発足をえて、「日中関係三団体」は「日中関係四団体」となるとともに、「全国学生中国研究会連合会」を合わせもつようになった。研究集会であれ、地方部会であれ、はたまた全国研究大会であれ、MPや警察による検問をうけることはなかったが、“Red China”（日本国政府発行のPassportには長らく“except Red China”と記載されていた）の走狗集団とみられ、内閣調査室の記録にのこされるという厳冬の時代が続く。それは今日のように「21世紀はアジア太平洋の時代である」といわれ、「中国研究」が生活の糧を得るための格好のテーマであり、時として職業でありうるような時代ではなく、「不利益を蒙り、不条理な処遇を覚悟する」時代であった。

この「不利益を蒙り、不条理な処遇を覚悟する」時代を象徴するものとして『人民日報事件』が想起される。日本中国友好協会は新生の「人民中国」の実態や情報をひろく国内各界に伝えるため、国際郵便を利用して、中国での刊行物、新聞、雑誌や書籍等を日本での刊行物と交換して、日本国内の主要な新聞社、雑誌社をはじめ大学、研究所や個人の希望に応じて配布していた。友好協会が発足して間もない1950年11月15日、平井巳之助氏（当時、大阪事務所責任者）ほか2名が「ポツダム政令第325号」に違反したという容疑（アメリカ占領軍の占領目的を損なうという容疑）で逮捕され、大阪軍事法廷にて重労働3年から6年という実刑判決を受けた。この時、同法廷に弁護側の証人として出廷した小沢正元氏（当時、中央事務局長）はその場で直ちに逮捕拘留され、そ

の後、赤津益造氏（当時、中央資料部長）が逮捕された。小沢、赤津両氏は軍事裁判により重労働5年の実刑と罰金500ドルが確定し、平井、小沢、赤津の三氏は1952年4月28日「講和条約（サンフランシスコ条約）」発効の日まで、大阪堺刑務所で服役することになる。この事件は「日中不再戦」を結社の目的とし基礎ともする日本中国友好協会、「現代中国学会」およびその構成員に対する文字通りの恫喝であり、なによりも「人民中国」にたいする封じ込めであった。

「現代中国学会」創立の基礎となった戦争責任、協力に関する議論は、折にふれ形を変えて展開されてきた。そして、1995年、「戦後50年というけじめの年」にあっても、「歴史の経験に学び、…」という国会決議をめぐるでも展開されたのは記憶に新しい。私は「日中不再戦」論の基本は次の点にあると常日頃考えている。これは私にとって基本であるだけでなく、ある時期までは多くの人々にとっても社会的生活および研究的生活を律する基本であった。今ここで、某年、北京で私たちが劉克明氏（外交専門家として議論した）との間でおこなった論議の一端を紹介しておきたい。

劉克明氏は「日本軍国主義は中国人民の不倶戴天の敵ではありますが、『9. 18』そして『7. 7』以降の中日戦争の期間を通じて、日本国の国民は中国人民の友人でありました」といい、「中国と日本の両民族間には数千年におよぶ友好と信義にもとづく往來の歴史がありました。これこそは中日両民族関係史の主要な側面であります。この側面は子々孫々まで伝え育まなければなりません！」という。これに対して、私たちは一つには「疑いもなく、日本軍国主義は中国人民の敵であり、日本帝国臣民の敵でありました」。「日本軍国主義（者）はかつて存在したし、今後も存在しないという保障はありません」。「したがって、『日中不再戦』という言葉の今日的意味は『再び戦うことはない、戦わせない、戦うことは拒否する』というものである。」と述べた。その二には「日本帝国臣民の青壮年男子が徴兵されて、職を離なれ家族と別れて兵士として訓練されたという面では、たしかに被害者であるといえるが、訓練された兵士として中国やアジア諸地域において戦闘に参加したという面は疑いもなく、加害者であるといわなければなりません。」等々と主張する。しかし、これに対する劉克明氏の反論は「いや！それは違います。中国人民と日本国国民は数千年来友好と信義にもとづく往來を保持し続け、かつ発展させてきました。これが歴史の主要な側面です。」と繰り返すものでした。こうした議論の過程で、私たちは「劉克明氏は私たちと議論しているのではなく、『9. 18』以後15年に及ぶ中日戦争によってその生命財産に膨大な被害をうけた中国の幾百万人民に対して、『われわれの敵は日本民族あるいは日本人ではなく、中国侵略戦争を發動した日本軍国主義という思想（者）である』と説得され発言されているのである。」と、彼が立論する視点を理解して、それ以上の議論を中断しました。

今日、劉克明氏との議論を想起する時、1987年夏の某日、「7. 7」50周年記念集会（大阪府立労働会館）において、依頼を受けた私が講演する前に上映された記録映画『上海事件』（亀井文夫監督）のカットが次々と脳裏に浮かんできます。亀井監督が生前「戦前戦中の作品は公開しないしてほしい」といわれていたにも拘らず、私たちは敢えてご遺族に記念集会の主旨を述べてご理解いただき上映する運びとなったのです。私はこの作品をみて亀井文夫監督の歴史観、平和観、人間観に感動しました。監督の視線（カメラ）は「もういい！もう十分に分かったよ！」という観衆に対して、なおも繰り返し繰り返し「上海市民の平和な日常生活の中に、日本帝国海軍陸戦隊の軍靴、銃砲や銃剣が殴りこむ」有様を表現してみせるものでした。そこでは、「海軍陸戦隊の

兵士は加害者として銃をもつて登場すると同時に、彼らが加害者であった故に被害者として土饅頭の下に葬られる」のです。「砲弾をうけ爆薬で破壊された家、路傍に転がる死体、等々が日本帝国臣民の『加害』と『被害』の両面を一つ一つのカットとして、私たちに突きつけられる」のです。「沖縄戦」時に日米両軍の軍靴によって踏みにじられ、今もなお「日米安保＝米軍地位協定」の下にある沖縄の諸君がこの作品をみれば、どのような感慨を抱き怒りを新たにすることでしょう？まことに皮肉なことに、この作品は日本帝国陸軍参謀本部、海軍軍令部推薦なのです。芸術がもつ有用性はここにあると思います。私たちは、この亀井文夫監督が堅持された立場にたって中国・アジア研究に精進する決意を「現代」という言葉に込めたのであります。

このように、「現代中国学会」は生まれつき「学会」らしい「学会」では決してなく、「日中不再戦」を願いかつ力を尽くす仲間たちの「討論集会」でありました。今、ここに「現代中国学会全国学術大会の歩み」（1951年、第1回大会～1993年、第43回大会）がある。この半世紀に近い歩みのなかで設定された共通論題から、「現代中国研究」の足取りを見ることができます。第1回大会の共通論題は「新しい中国文化の特質」であり、当番校は東洋文庫でした。それ以後、共通論題は「人民中国」が直面する課題を扱いつつ、日本をふくめた世界情勢の推移につれても、その設定視点を変えてきました。

共通論題の設定視点如何から「現代中国学会」の歩みを区分するとすれば、およそ次のようになりましょう。第1期は、ソ連邦ネップ時期と新民主主義的変革の時期（国民経済復興期）との共通性と独自性を検出することを問題意識として、新民主主義段階から社会主義段階への連続的發展等々が論じられた時期であり、それは第1回大会から第4ないし第5回大会（1951年～1954・5年）に相当する。私がこの学会で最初に報告する機会をえたのは第4回大会（1954年、共通論題「中国における過渡期の総路線」、愛知大学〈小岩井浄学長〉）においてである。第2期は、第6回大会（共通論題「魯迅」、立命館大学〈武藤守一教授〉）をやや異例として、第7回大会から第14回大会までであり、「国際共産主義運動の総路線に関する論争」（「中ソ論争」）や「修正主義批判」を問題意識の基底におきつつ、中国共産主義の独自性探究を主要な課題とする時期であり、建国10年を回顧し展望する共通論題が設定された。

京都ではほぼこの時期と重なりあって、京都日中経済学交流協会が発足し『経済研究』誌上の論文内容を会員に紹介する活動を始めていた。やがて同協会訪中団を派遣する気運が高まり、京都ホテルのロビー等で準備会が数回開かれた。その時のテキストの一つは陸定一（たしか統一戦線部長）の『社会科学者の戦闘的任務』であった。この学術訪中団（団長住谷悦治〈同志社大学〉、豊崎稔〈京大〉、小椋広勝〈立命館大学〉、秘書吉村達次〈京大〉）は関係省庁の「不急の旅に貴重な外貨を使用すること、好ましくらず」等々という非協力を排して、経済学交流の糸口を開いた。この団は在北京の経済学者と交流を進め、河上肇先生の門下生である王学文老教授らとも友誼を深めて帰国したが、その後、国内外の諸事情から持続的交流は中断された。

そして、第3期になると、共通論題の設定や大会運営等の面に「文化革命」の影が色濃く反映されるようになる。それは第15回大会（1965年、共通論題「中国における階級闘争理論をめぐる諸問題」、明治大学）から第25回大会（1975年、共通論題「プロレタリアート独裁の歴史的経験と新しい展開」、山口大学）をはさんで、第30回大会（1980年、共通論題「転換期における中国」、徳山大学）に相当する。そして、第3期末にあたる第27回大会（「文化大革命10年を回顧して」）が立命館大学で開催さ

れた。この時期をつうじて、一方では「思想信条にかかわる」問題を研究的視点から論ずるのではなく、狭義の政治的視点から扱う傾向が強まり、他方ではそれに反発する傾向も強まった。こうした傾向は大衆的な国際親善友好運動の方面つまり日中友好協会の活動にも強く見られるようになった。こうして、「人民中国」を「思想信条の相違をこえて」「日中不再戦」という合意を基礎にすすめる「現代中国研究」は難題に直面することになったのである。第4期は、第31回大会（1981年、共通論題「社会主義的民主主義と現代化——中国型社会主義とは何か？」、中央大学）から現在までの時期であり、内外の諸要因による難題を「現代中国学会」を「学術団体」らしい「学会」にすることで解決しようとしてきた。第4期にふくまれる第35回大会で、私は「中国経済体制改革の理論的根拠にふれて」（1985年、共通論題「中国型社会主義の模索」、帝塚山大学、問題提起者常磐絢子慶應大学教授）を共通論題の一つとして報告した。第4期には共通論題の設定や大会運営は比較的順調かつ平穏になったが、草創の時期にみられた「時代の流れに抗して、新しい流れを生み出す」という『覇気』に欠ける側面なとはしなくなった。

こうした側面は「東体制が崩壊し、体制間対立が存在しなくなった」今日、さらに全面化する気配をみせているが、「体制間対立を現代世界の主要矛盾と解する」立場をこえて、なお厳然として存在する資本と賃労働、企業と労働の対峙が国際化している事態を意識化する立場から、「学会」の責任として「戦後50年国会決議」にみられるような歴史認識に対して発言する必要がある。「国会」の名において家永教授が『教科書裁判』をつうじて告発された歴史認識や教育が肯定されているのである。今こそあらためて、亀井文夫監督が『上海事件』を映像化した立場を復活させるべきである、と思う。

4、「現代中国研究」40数年間、ご教示をうけた諸先生と先輩：

現代中国研究40数年の間に、さまざまに御教授頂いた先生方や先輩諸氏を手掛かりとして、時代の流れを振りかえることにする。

金子二郎教授（大阪外国語大学、後、同学長）：

金子教授は外務省官吏として日本帝国の対中国政策が北方（北洋）支持派と南方（孫文）支持派とに別れた時、南方（孫文）支持派に組まれて志を得ず、職を辞されて大阪外国語学校の教員となられた。戦後、『中国語新辞典』（井上翠編、1954年、江南書店）の編集・出版を主宰された。

私が1948年（昭和23年）春、大阪外事専門学校中国語科（一般に「外専」と呼ぶ）に入学した頃、学舎は高槻市の工兵隊兵舎跡を利用していた。私たち学生の生活でいえば、衣の面では元陸海軍軍服を着用しておれば立派なものであり、食の面では、三度に一度固形食物（イモ類）を口にできればよい方であったから、学生が栄養失調にならないようにとしばしば「食料臨時休日」があり、食料買い出しに出かけた。学習生活でいえば、テキスト類は市販されておらず、すべて謄写版の手造りであり、クラス学生が当番で用意する。当番がサボルと授業は休講となる。語学学習に必須の辞典類は京都市や大阪市の本町で入手するか、卒業する先輩の御好意による以外に方法はない。そうした中で、私は『兵器・装備優劣論』では解けない謎に迫ることに性急のあまり、「Bo, Po, Mo, Fo, …」という中国語の発音を訓練する授業にはあまり出席せず、社会科学研究会等での読書会に夢中であった。

私が外専在学中、「大学管理法(?)」制定や学費大幅値上げ提起があり、学生自治会が都道府

県別の連合組織をつくり、さらに全国学生自治会連合会を組織する機運が一举に高まった（武井昭夫、安藤甚兵衛等々）。外専学生もその渦中にあった。これに加えて、1950年6月「朝鮮戦争」が突如発動された。その日常生活や学習を安定させようとする自治組織は政治的課題に取り組みざるをえなくなった。全国的に「朝鮮戦争に反対し、生活を擁護する」運動が展開された。当時、金子教授は教務部長の職にあり、私たち自治会や研究会は教授が学生諸活動をその管理監督の下におこうとする保守反動の中心人物であるとして、事あるごとに批判し激しく対抗する関係にあった。そうした某日、GHQが私に一片の通達を交付するため、人を学校まで派遣してきた。その時、金子教授は私が未登校であると言い立てて、その通達を代わって受け取り、「松野に会わせるで一騒動になる。代わって受け取っておいた。読んで聞かせる。わかるな！君にこの通達が手渡されたのではない。」その通達は私名義で編集発行されていた某出版物の発行を「3ヵ月間差し止める」というものであった。その数週間後、「とくに連絡あるまで、発行を差し止める」通達があった。各新聞紙上にこれが報道された（50年7月初旬）。

こうして、事実上、私はレット・パーズされ、社会的に葬られたのである。金子教授は私が卒業した時、『小人閑居して、不善を為す』という。どうせ、職はないのだから、毎日、研究室にきて本でも読むようにせよ。近い機会に、僕の外務省時代に集めた書物等を部屋に運んでおく。』こうして、『兵器・装備優劣論』では解けない謎に迫る機会に恵まれたのである。この頃、読んだ文献には『中国人民政治協商会議共同綱領』、『中国共産党規約』や『新民主主義論』『持久戦論』等がある。（ちなみに、後の2冊の初邦訳本は京都某々書店発行であるが、その所在地は川勝伝氏（後、南海電鉄社長）の御住所と同番地）私が書物を読み、文章を書いて生活するようになる契機を提供されたのは金子教授である。また「魯迅総合研究」（文部省科研費）を組織されて、私にその事務局を引き受けさせ、月刊誌『現代中国』の編集する中で、アルバイト収入を確保頂いたのも金子教授であった。そして、在阪の他大学の中国研究者にご紹介頂いたのも教授の御配慮による。

また、例の『人民日報事件』発生の際、「松野！君は平井君に頼んで『争取持久和平、争取人民民主』というコミンフォルム機関誌を読んでいるな。あれは危ないぞ！明日にでも、研究室にもってくるように、今我々は辞典編纂中だ。語彙収集の素材として我々の責任で保管する。」あの機関誌は今も外大のどこかに保管されていることでしょうか。私事ながら、私どもが結婚する時、天野元之助教授が委員会委員長を引き受けて下さり、金子教授が媒酌人を引き受けて下さった。

先生晩年、某年某日、私は東山馬町のお宅まで呼ばれた。金子教授は「王芸生氏『六十年来中国与日本』（建国ご1982年、生活・讀書・新知三联書店、北京）を解題翻訳する仕事を完成させたい。私も頑張るから、君も手伝え！」と御下命をうけた。教授が外務省時代にその解題翻訳を果たしえなかった事情に加えて、王芸生氏（戦前、上海『大公報』紙主筆）が当時中国人民対外友好協会副会長であったことにもよると思われるが、日本国内とくに京阪神地方で御協力頂く日本外交史専門家を得ないままについに完成することなく終わった。今なお、誠に申し訳なく思う。

平野義太郎先生（中国研究所所長、日本平和委員会代表）：

平野義太郎先生は、中国研究所創立から私が金子教授のお供をして同研究所を訪問しはじめた頃、所長でありました。中国研究所は戦後「日中関係四団体」の中で唯一社団法人格をもつものでありました。中研は市ヶ谷一口坂を北に下ったところに二階建の木造ながら瀟洒な建物を構えていました。敷地と建物は社団法人中国研究所の所有物でした。よく基金が集まったものだと思

いますが、敗戦によって満州鉄道調査部や東亜研究所が解体され、民主日本国でのアジア・中国研究の拠点を求める声が強くなり、多くの有志が気持ちを一つにし浄財を集められたのでしょう。

その図書資料室にある図書や資料の多くには東亜研究所の蔵書印があり、個人の蔵書印があるものも数多くありました。中華人民共和国が誕生した後では、新中国政府の好意により香港を経由して多くの新しい図書や資料が入手され所蔵されていまして、中国、アジア関係では全国唯一を誇る資料センターであり、また、スタッフの面でもGHQによって解体された研究機関の研究者等々が参画しており、戦後日本における中国・アジア研究の中心的存在でありました。当時、幼方直吉、米沢秀夫、浅川健次諸氏が常勤研究員を勤められ、若手では野沢豊、本橋渥、新島淳良、松本昭の諸氏がおられて研究会の中心メンバーでありました。

平野義太郎所長は「現代中国学会」の会長にも就任されましたが、年次大会に出席され学会議論に参加された様子を拝見した記憶はあまりありません。ただ、学会総会の席で「朝鮮戦争」停戦交渉の進展につれて、ストックホルム・アピールがもつ意味やその諸活動および世界平和評議会の活動近況を報告をされ、両体制の赤裸々な対立から「平和共存、平和競争」へと世界が動きつつあるという、先生の世界的範囲でのご活躍をうかがう機会が多くありました。50年代半ば、日中間の民間交流がモスクワ経済会議（52年4月）以後、経済交流の分野にまで拡大される中で、先生が参議院議員（全国区）に立候補された時、関西経済界が日中貿易促進運動に積極的であった事情から、大阪地方が選挙活動の重点となりました。まだ浪人中であった私は大阪方面の選挙カーの責任者として、梅田界隈の安宿に泊まりこみ、早朝から疲労の色濃い先生を荷台に押しあげては、町に繰り出したことがありました。残念ながら、結果は不本意なものでありました。先生のご令嬢平野（常磐）絢子氏とは学会等でしばしばご一緒する機会があり、第38回大会での私の共通論題報告「中国経済体制改革の理論的根拠にふれて」に対する問題提起者として、体調不調のなかを敢えて御教示頂きました。

天野元之助教授（満鉄調査部、戦後京大人文科研講師、大阪市立大学文学部教授）：

芝池靖夫先生等から天野元之助教授が戦前と戦中、満鉄調査部上海で「天野シュール」を形成されたと聞かされており、私はいささか畏怖していましたが、現代中国学会関西部会等でお会いしてみると、厳しいなかに実に柔和な面をおもち先生でありました。私の現代中国研究が農業問題から始まったのは天野先生のご指導による。先生から自著『支那農業経済論』や『支那農村集記』を購読して頂き、仁井田陞『中国（支那）農村慣習調査報告』を読むようにと指導をうけました。私の中国農業に関する論文は発表前にはほぼ例外なく天野教授の校閲をへている。京大人文研在任当時、教授は泉涌寺内にお住いであったが、大阪市立大学に移られて後、お宅を枚方市菊丘に定められた。朝夕通勤の車中では必ず「人民日報」に目を通される。まさに寸暇を惜しんで読書され研究される。それだけに、研究会での質問はまことに鋭く容赦ないものでありました。私たちが近くに住んでいたこともあって、先生が御存命中には、毎年元旦早々にご挨拶にまいりましたが、「今日、朝から原稿5枚書いたよ」と精勤ぶりを自ら披露される。すると、奥様は「松野さん、天野は自分の子供を抱いたこともない人ですよ！」と反撃されて、私に援軍を送られたことでした。その時、先生はそれが癖の唇に力を入れて、実に恥ずかしげな顔をされる。その頃、先生は後に学士院賞を受けられる『中国農業史研究』（1962年、お茶の水書房）を執筆中でありました。

私が現代中国学会の第4回大会ではじめて学会報告すると意思を表明した時、先生は「それは関西部会で予め報告して、関西会員に鍛えてもらおう。」と臨時部会を用意して下さり、大学で現代中国経済論を講義するとなると、先生はご自身の講義ノートを参考にせよと借用させても頂いた。研究上をはじめ様々面でお世話になった先生の還暦を記念する『現代中国経済論』（1961年、ミネルヴァ書房）に「農村人民公社の構造」という拙文を書かせて頂いた。先生が死去されて、もう20年のもなろうか？地域の児童民生委員によれば、ご夫人は床に就かれきりの日々であるという。ご夫人は若い頃に歌手になる夢を追われた程に気位の高い女性でありますだけに、訪れる機会を得ないまま今日に至っている。

福島正夫教授（東京大学教授、後早稲田大学教授）：

平野義太郎先生が現代中国学会会長を辞され、天野元之助先生が健康上の理由で会長を辞された後、福島正夫先生が会長の任につかれた。それは、中国が文化大革命の時代を迎えており、国内では大学問題で大童であった時代つまり内憂外患もごも来る時代であった。その頃、春秋の研究集会を企画し開催するにも困難をともなったが、福島会長は研究集会の開催について些かも躊躇されることはなかった。一橋大学が当番校であった年度（第19回大会、共通論題「世界革命と中国」）、大会は学内の諸事情から国立の学舎ではなく一橋会館を会場として開催された。共通課題の設定に始まり研究発表会や学会総会の進行についても、議論百出して収拾困難な局面に臨んで、福島会長は果断に判断された。私は針生誠吉氏（当時、東京都立大学教授）とともに総会議長として議事進行の責任を果たせたのも福島会長の御支持を受けたことによる。当時、中華人民共和国の国際的地位や信頼が高まる中にも拘らず、日本国政府の対中国政策には「中国国連代表権問題の重要事項指定」等々に見るような不条理さが際立った。現代中国学会はその設立の趣旨からして、総会で政府の不条理を指摘し対中国政策の見直しをも求める決議を採択した。福島会長は、その決議文を関係省庁を訪問して手渡したり、広報機関を訪問して広報方を依頼してまわられた。福島会長は戦前学生時代にセラーとして活動されただけに、誠に真摯に「日中不再戦」を掲げる「現代中国学会」をその全人格でもって具現された。

他方では、第25回大会終了の後、会員有志が会長日頃のご苦勞に感謝し慰勞の会を上関（「鳩子の海」〈NHKドラマ〉）で開こうと企画した際、破顔一笑されて「それはいい！今は瀬戸内の鰻（河豚）が美味しい頃だ。」喜ばれる人柄でありました。新島淳良氏が内外の理由によって中国研究から身を引くと言い出した時、繰り返し思い止まるように説得されたのも福島会長でした。教授は公私多忙を極める中、関東部会に属する会員諸氏との討論の中で『人民公社の研究』（1960年、お茶の水書房）を集成されるとともに、後に学士院賞を得られた『地租改正の研究』（1962年、有斐閣）を集大成されるなど、六面八臂のご活躍でありました。

東大を定年退職されて早大に勤務されていた頃は、なお御壮健の様子で毎年の大会には出席されて、例のように汗を拭き々々持論を述べられたが、体調宜しからずと会長を辞された後、5年ほど前であろうか、訃報に接して呆然自失したものである。福島会長が教え子のような若い会員の研究報告に対して、誰よりも率直に質問され、討論されたことが昨日のことに思われてならない。私は福島会長から真摯な態度とはどの様なものであるかを学ぶことができた、と思う。

一円一億教授（関西学院大学法学部教授）：

一円教授は愛知大学から関西学院大学に移られて後、関西部会の強力メンバーとなられた。浪

人中の私を大学の一円研究室に呼ばれて、ゼミ生に対するチューター役を仰せつけられた。中華人民共和国はその建国に際して、「中国人民政治協商会議」の『共同綱領』を「臨時憲法」として運用してきた。当時、中央政府（中央人民政府）は政務院と呼ばれたが、これも『共同綱領』の定めによる。したがって、研究者は法的手続きをへて『憲法』が何時どのように制定されるのかに強い関心を寄せていた。一円教授は「憲法学者」であられたから人以上に関心を寄せられていた。そして、1954年9月某日、国際新聞社外信部から「本日中には入電するであろう」との連絡を受けると、教授は私を伴われて柴田稔（後、関西大学文学部教授）外信部長室まで出向かれ入電を根気強く待たれた。やがて、新華社の予告があり『憲法』前文から一節づつ入電し始めた。全文を受信し邦訳し終わるには数時間を要した。こうして、一円教授は憲法学者として最初に『中華人民共和国憲法』（後に「54年憲法」という）をに入手され読まれた。教授は私を従えて信濃橋の社屋から阪急電車梅田駅まで足早に道をとつつ、「明日、研究室でゼミ生と読む。君も是非来てほしい」といわれた。

その後、事態が展開するにつれて、『憲法』は数度修正されてきたが、この『憲法』の規定によって、政務院はその名称を國務院と変えて、今日に到っている。私が後年『中華人民共和国憲法、同提案説明』（1957年、江南書店）を出版することになったのも一円一億教授のご教示やお勧めによる。教授は関西学院大学を退職され、大阪市北区に法律事務所を設けられて以後、現代中国学会に出席されなくなった。

野間清教授（元満鉄調査部、戦後中国研究所をへて愛知大学教授）：

野間教授からは『支那抗戦力調査報告』に関わる満鉄調査部事件等々の秘話をお聞かせ頂き、私が「1952年末、他の主要な農産物が史上最高水準に回復しそれを越えてもいるのに、大豆産量だけがまだ回復していない。なぜでしょうか？」とお伺いを立てますと、「そりゃ！松野さん、満鉄は中国東北部を支配し経営する中心的な国策会社ですから、業績を絶えず上げなければなりません。大豆は東北部の主産物であり搾油作物としても重要作物ですから、国策からして年々収穫量は増加しなければなりません。君が依拠している史上最高産量は虚偽ですよ！」といわれる。「満鉄本社の指示に従って、報告を水増ししたのは僕たちですよ」と教えて頂いた。「これが日本帝国の中国東北支配の実態をよく示しているといえましょう。」ともご教示頂いた。

教授は満鉄調査部事件では、憲兵隊や官憲の追求に耐えられて、累が他に及び事件が拡大することを阻止された。まことに温和なご容貌やご言動は頑強かつ強靱な信念によって支えられているのでありましょう。東海道新幹線が開通した当時の岸国鉄総裁もその頃教授から些か庇護を受けた一人であるといわれる。ちなみに、故高橋良三教授（立命館大学産業社会学部）はこの事件後、「報告書は見事なものでしたから、満鉄本社や関東軍でさえ無視できず。私が報告書を携えて各関係方面に口述補足報告する役を仰せ付かり、上京したことがある」（談）。と往事を偲ばれたものでした。

また、中華人民共和国成立後、新政府の要請によって専門家として残留された生活の中から、多くのことを示唆して頂いた。例えば、「向蘇聯学習！」「向蘇聯一辺倒」は上の句であり下の句「按地制宜」と一体のもので、ともいわれる。「自力更生を主とし、対外援助を従とする。」「鉄鋼を要として、（工業を）全面的に発展させる。」「食糧を要として、（農業を）全面的に発展させ、多角化する。」等々は教授によれば、それぞれ上の句であり下の句であり、一体となって始めて

十全の意味を持つものになります。「体調芳しからず、家にこもっています」とお便りを頂戴してすでに久しい。

川勝伝先生（南海電鉄社長）と宇田耕一社長（尼崎製鋼）：

川勝伝先生の日中関係でのご活躍は著書『友好一路』（1985年、毎日新聞社、聞き手小島康生氏）に詳しい。とくに、日中貿易促進運動に関しては、先生ほど首尾一貫された人を私は知らない。川勝伝先生を理事長とした関西中国研究センターを設立し、峰永了作氏や里井達三朗氏等と一緒に放談する会合を開いたことがある。先生体調をくずされて、残念ながら数年で幕を閉じました。先生は中国研究所設立以来の研究所員であり、上京されるとよく研究所を訪問されたという。後年、私が研究所員の末席を汚していた頃、関西在住の所員から研究所理事を選任する必要が生じて、川勝伝先生に就任を懇願しましたところ、先生は「私は終生一介の所員でありたい」と固辞されて、私が理事を勤めたことがあります。『友好一路』が出版された際、私も一冊頂戴しましたが、「サインをして下さい」とお願ひしますと、「松野さん、サインというのは印税を貰う人がするものです」と断られました。これが悔やまれてなりません。関西中国研究センターの設立や運営については南海電鉄秘書部の皆さんには随分お世話になり、お礼を申し上げますと、先生は「これは私の趣味、道楽の一種ですよ」と破顔一笑されました。

経済界の方からも種々ご教示頂いたが、その中でも宇田耕一社長（尼崎製鋼）からは「コメコン」「チンコム」の実態を極めて具体的にお教え頂いた。「トタン板は人民解放軍兵舎に利用されると戦力増強になるから、輸出は禁止だということです。それなら、綿布一尺を輸出することもできない。軍服の一部になりうるというわけです。これは明々白々な道理なき封じ込めですよ！」宇田耕一社長は後年故郷の高知県から国会議員（自民党）になられた。私は川勝伝先生や宇田耕一社長から「抽象的な思考や論理から事実を理解し議論することの不十分さを教えて頂いた」のであると感謝している。「实事求是」これは毛沢東が「書物の中に真理があるのでなく、実事の中から真理を求めるべきだ」と述べたものであるが、川勝伝先生や宇田耕一社長も経済界という現実に生きる過程で同じ地平に到達されたのであろう。

その他の多くの方々：

「日中不再戦」という現代中国研究の過程において、折にふれ事にふれて、実に多くの先生や先輩からご教示頂き、時にはお叱りを頂戴しました。一つ々々お礼申し上げる余裕は今はありません。それは後日のことといたく存じます。お許し下さい。

5、大阪市立大学経済研究所の中国・アジア研究：

大阪市立大学経済研究所は大阪市が1950年半ば以降関西経済とアジア諸地域経済との関係進展を見て予算措置したのを受けて、アジア・中国研究に着手することになった。その着手に際して、「まず、語学を学習しよう」ということで、サークル学習が始まった。私もそのチューターとして駆りだされた。その頃、私は大阪外国語大学卒業後、GHQ パージで失職中であり、チューター収入は実に貴重な小遣い銭となった。卒業後まもない私は当時研究所の重鎮であった狭間源蔵教授、林直道教授、尾崎彦朔教授や中堅の杉野明夫氏、藤本昭氏に向かって、中国語入門を担当した。今なお林教授にお会いする機会がありますと、「松野先生、お変わりもなく何よりです」と諧謔を交えたご挨拶を頂く。しばらくして、中国経済と関連して「経済資料」を翻訳・タイプ

印刷発行することになり、この仕事では「社会科学・経済文献を厳密に読み取る」という面で私が鍛えられる羽目になった。その頃、中国では「統購、統銷」に象徴されるような指令的計画経済体制が創建中であり、この創建過程を跡づける作業をすすめた。当時、大阪市立大学の杉本町学舎は未返還であり、研究所はたしか靱小学校校舎に間借りしていた。源蔵先生は「左きき」であり、学習や翻訳作業の節目に、大阪拘置所近くの「美」を○で囲んで屋号にした飲み屋にしばしば連れて頂いた。梅田近辺の飲み屋と私のつき合いはこれに始まる。この頃、先生から御息の進学のことについて意見を求められた。「言葉は用具であります、それに盛の中身が大事だと思います。」と柄にもないことを返答した記憶がかすかにあります。狭間直樹氏（現、京大人文科学研究所）に関わることなどは知る由もありませんでした。狭間直樹氏とはその後折にふれてお会いする機会があるので、その度に記憶が新たになるのでしょうか、あの飲み屋の看板や座敷の上張りを今でも眼前にする思いであります。源蔵先生等にお連れ頂いた、大阪地方裁判所付近はすっかり再開発されて、昔を偲ばせるものは府立図書館と公会堂だけになりました。『中国の経済建設』（1956年、日本評論社）は、こうして始められた調査研究の集大成であり、その序章は名和統一教授の筆によるものでした。私も諸先生や先輩に教示を頂戴しつつ、「農業生産協同組合における分配問題」を書く機会に恵まれ、文体の統一や校正等々でまたまたお小遣いを頂きました。

大阪市立大学といえば、経済研究所のほかに、経営研究会にお誘いを受けて陪席しました。この研究会は上林貞治郎（商学部教授）が主持される会であり、儀我壮一郎先生（後、商学部教授）、梅川勉先生（後、商学部教授）内藤昭先生（現名誉教授）等々当時新進気鋭の研究者からご指導を受ける機会を得ました。儀我壮一郎先生からは、先生が私と同じく京阪電鉄沿線にお住まいであったこともあってか、伏見のお宅にお招き下さり、御父君が張作霖氏や張学良氏から頂戴された記念写真等を見せて頂いたり、時には酔いにまかせて一夜お泊め頂いたこともある。また、拙文については文章作法や用語にいたるまで細かなご指摘に預かった。ことごとく左様に、大阪市立大学経済研究所や経営研究会の諸先生には随分鍛えて頂きました。

後年、教授が日本学術会議に立候補された時、私はたまたま立命館大学経済学会委員であり、同選対委員を勤め間接ながらお手伝いの真似事をしたことがあります。塩田庄兵衛先生が立命館大学に赴任され、学部長を勤められる時に、「儀我君から松野さんのことはよく聞いています。新参者ですから、一つ学部主事として手助けして下さい」と依頼されましたが、私はすでに数年前に岩井忠熊委員長の下で二部協議会主事を勤めた経過もありましたが、「塩田、儀我両教授からのご依頼である」と解釈して二度の勤めを果たす決意をしました。

大阪市立大学経済研究所や経営研究会の当時の諸先生方とは、近年お会いする機会に恵まれないままに過ぎている。ここに、あらためて過年のご指導に対して深く謝意を表することで、御無沙汰をお許し頂きたく存じます。

その頃、ご一緒した杉野明夫氏は研究所退職後、大阪経法大学でなおご活躍であり、藤本昭氏は神戸大学に転じられ退職されて、今は姫路独協大学に在任中であり、時には学会等で拝顔する機会があります。また、山口大学から流通経済大学に移られ、「災害」に見まわれた小島正己氏、熊本商科大学から関東の大学へ転じられ、亜細亜大学に在任中の游仲勲氏等と拝眉の機をえないままにすでに久しい。今後とも従前に増してご指導頂きますれば幸甚至極であります。

6、中国経済学界、その他の先生方：

「8. 15」を契機にして、私の関心を引き、解き明かすべき謎である中国と対面しつづける中で、中国経済学界やその他の分野で実に多くの方々からご教示頂き、あるいはご示唆を頂戴してきました。この機会をお借りして、あらためて謝意を表したい。10数回を数える訪中の中で、ご教示あるいはご示唆を頂戴しながら今なお報いえずにおります諸先生としては、董輔弼教授を始めとして、以下の諸先生を想起します。まず、北京では、1984年度私の在中国研究の引受け機関の責任者である劉国光教授（中国社会科学院副院長、現國務院経済中心）、1950年代に国家計画委員会副主任を勤められ、私どもの娘三人を可愛がって下さった劉明夫教授御夫妻（財貿研究所所長、30年代初頭にごく短期間日留学され、ある事がらを契機に帰国された）、84年8月私をして日本経済学会で報告せしめた孫尚清教授（國務院経済中心、日本経済学会会長）、今なお御健勝で毎年、孫尚清教授共編『中国経済形勢与展望』（経済白皮書1993—1994）を公にされている馬洪教授（工業経済研究所所長）、私の北京滞在中、中国社会科学院大厦（建国門外）建設の責任を負いつつ、関係方面に御紹介頂いた孫耕夫教授（哲学研究所所長、中国社会科学院副秘書長）、経済研究所に通う日常生活上での食事や健康等々に配慮頂いた戴有振研究員御一家（世界経済研究所研究員、発達国研究組主任、故人）、孫治方老所長晩年に秘書を勤められた冒天啓研究員（経済研究所研究員）、等々。

ついで、天津市方面では、立命館大学と交流協定を締結した当時の学長藤維藻先生、『政治経済学一理論編』の主編者である谷書堂教授（天津南開大学経済学院院長）、大連女学校の廃校とともに中退した経歴をもつ丁愛菊女史（南開大学外事処、夫君は地球物理学者）、等。

その他の交流では、末川博先生が私の訪中に際して親書を託されてお届けした廖承志先生（中日友好協会名誉会長、日中国交正常化の後、「中日友好之船」団長として来訪された時、大阪グランドホテルの歓迎会でも拝眉の機をえた）、周恩来総理の意向を受けて日中国交正常化のために尽力された孫平化会長（中日友好協会会長）、訪中の度に公私両面からお手伝い頂いた肖棣華常務理事（中日友好協会）、唐家璇理事（中日友好協会、後、外交部長助理）、また、かつて日本帝国臣民であり、桂林反戦革命同盟（日本兵士の会）の面倒を見られた康大川先生（『人民中国』編集長兼社長）、等々。

上海復旦大学では、まず、当時学部長として私の研究滞在を引受けて下さった蔣家俊教授（経済学部教授、84年晩夏、教授数名とともに社会調査実習中の学生視察を名目に私を1週間江南の地杭州・紹興市へお連れ頂いた）、社会主義所有における所有と経営の分離をすでに唱えられていた蔣学模教授（経済学部教授、御子息も経済学者）、私の滞在中著書『中国現代経済史』を購読され、時として「1870年代以降のシルク世界市場」について「管見」を述べよと指示された陳紹聞教授（経済学部教授、経済史南方派の1人）、かつて日本帝国臣民として私と国籍を同じくし、同大学世界経済研究所所長を勤められた鄭勵志教授（経済学部教授）、私の学内生活や上海市、近隣地方への視察等に御一緒頂いた尤憲迅助教授（経済学部）、等々。

上海市方面では、「大躍進」を総括する蘆山会議の席上、彭徳海（当時国防部部长）とともに毛沢東首席と論争した韓哲一副市長（上海市と大阪府の友好交流協定締結のため在阪中、拙宅を訪問された）、上海市外事弁公室で対外（特に対日、横浜市、大阪市と大阪府）友好諸活動に長年従事された林徳明副主任（御夫人尹敏女史は上海市体育委員会幹部）、上海解放前から報道関係で活躍された陳安友副会長（上海市人民対外友好協会、『中国経済日報』社副社長、故人）、2年前、上海国際問題研究所副所長を辞された後も、しばしば上海市派遣の学術代表団の団長や秘書長として来日される陳

一心秘書長（上海市人民対外友好協会）、対外友好協会を退職された後も、上海市翻訳協会では往年にもましてご活躍中の「韓おばちゃんは今も元気ですよ」韓菊芳女史、天皇と握手した手では私と握手しないと冗談をいう張国平（上海市翻訳局局長）、天皇皇后の上海市滞在中終始通訳にあたり、日本で研究されていた昨年1月「震災」で瞬時にして圧死した衛紅女史、等々。復旦大学滞在中、上海市人民政府の関係機関から私の市内及び近隣地方の企業や農村を視察したいという希望を満たすため種々ご配慮頂いた。特に、秋錦の候「文書でもって明白に内陸部視察の計画、視察項目を提出するよう」指示を受けて、成都、重慶、大足、宜昌、武漢、岳陽、長沙等々を訪問し、各地の計画委員会副主任級から状況説明を受ける機会に恵まれた。「一条龍」「龍頭是上海、龍尾是重慶」と呼ばれる実態の一面を体得することができた。

こうした交流の中で、特に印象深いことが一つ二つあります。その一つは1978年3月、学部主事を勤めていた私は、塩田学部長と経済学部教授会の御理解をえて、小林義雄教授を団長とする訪中団に加わり、北京、上海、長春で調査報告を行いました。接待機関は世界経済研究所であり、報告課題は数年前同研究所から提起された「日本企業における教育・訓練システム」でありました。団長報告は北京の中国人民政治協商会議礼堂の大講堂で行われ、私はその翌日西単の西にある民族飯店の大会議室で報告「家電産業における企業内教育・訓練システム——松下電器産業を事例として」を行いました。そして、上海へ移動する早朝、首都機場へ向かう車の中から西単の「民主の壁」に貼り出された新しい墻報の題目「劉少奇是人？還是鬼？」を目にしたことがあります。それは文化大革命の終焉近しを思わせるものでした。そういえば、この団は「宝山製鉄所プラント二次契約凍結？」というニュースにおくられて羽田空港を離陸し、「劉少奇是人？還是鬼？」におくられて離京したことになります。私たちのテープが先着しており、上海でも質疑応答の会合を開く計画であると聞いて、最後の訪問地長春の吉林大学で報告する予定であった小島正己氏は「答案未提出は僕だけではない」という。その二つは、1975年夏7月林要老教授を団長とする社会科学者代表団に参加した時のことです。秘書長斉藤秋男教授、団員は阪本楠彦教授、針生誠吉教授等であり、北京、西安、延安、上海を訪問する旅でした。北京から西安への移動日（「8・1建軍記念日」）の朝食時、肖棟華氏から「李先念副総理（後、国家主席）がお会いしたいとのことです。人民大会堂に向かいます。」と連絡がありました。林要団長を先頭に私たちは四川省の間で懇談する機会をえました。その懇談の中で、李副総理は「延安では必ず『革命記念博物館』を訪問して下さい。その入口正面には『歩兵銃、袋詰めのアワと小銃弾（これは樽掛けにする）』が展示してあります。私たちはその『歩兵銃、アワと小銃弾』で日本帝国軍隊やアメリカ軍に支援された国民政府軍と戦い勝利したのです。現在、我々は当時より遥かに優れた兵器・装備を数多くもっていますが、『歩兵銃、アワと小銃弾』でもって果敢に戦った心を失っては、前途はないと考えています。」と語られた。

李先念副総理は、国父孫文が「5・4」運動の中に「鉄砲に幾十倍、幾百倍する『人民の心力』」を見いだされたのと同じ地平に立たれていたのであろう。李先念副総理だけでなく幾万、幾十万さらに幾百万の人々が『人民の心力』を自覚し互いに確かめあって、大いなる敵に敢然と立ち向かったことでありましよう。

『兵器・装備優劣説』では決して解けない謎は、生れつき怠け者の私にとっては、今もなお解けないままにあります。それは一つの謎が解けたと思えば、また、新しい謎が現れるからであります。